

ユニバー（世界学生選手権）日本代表選手決まる

松澤 俊行他

この夏も、8月29日から9月2日までの5日間、フランスのロアンヌで、世界学生選手権（通称ユニバーシアド）が開催される。この大会は、国際的な学生のスポーツ団体であるFISUが開催するものであるが、団体が開催するユニバーシアドには、五輪のように、他種目が一堂に会するものと、単独で開催されるものがあるが、オリエンテーリングの場合後者である。日本はこのユニバーに1979年以来、連続して出場しており、過去には山岸倫也や村越真、鹿島田浩二、加賀屋博文、松沢俊行、福士（現：高橋）淑子、金子（現吉田）しのぶなど、日本を支えたトップ選手が出場している。

本年度は、4月30日の選考会が開催され、社会人一年目（ユニバーでは、卒業した翌年の夏まで出場できる）の山口大助（千葉大）と伊藤恭子（筑波大）がどうどう1位で通過。それ以前の実績を併せて、男子は、高橋善徳、柿並義宏、山口大助、金沢拓哉、鈴木慎一郎、紺野俊介、女子は赤石英美、伊藤恭子、塩田美佐、小林啓恵、深沢博子が選考された。

94年ユニバー出場の大先輩である松沢氏が選手を紹介、インタビューを行った。

赤石英美

1995年東京農業大学入学 千葉県出身 京葉OLクラブ



最近表情が落ち着き、レース中の大爆発も影を潜めた。オリエンテーリング競技者として最初の成熟期を迎えた感がある。時折マイナスに働くこともある「物事を真剣に考える気質」を、連続出場となるユニバーに対してプラス方向に作用させられるかどうか。

（選考会では、「この選手には勝てないだろう」という選手を予測、自分の走りに徹し、ほぼ予測通りの結果を得たというが・・・。）・・・このままではいけない、と思っている？

「現状自分のできることを理解して、その範囲でやるだけやってレースをまとめたとしても、ミスは沢山しながら思い切って走っていた頃より悪い結果にしかありません。走力を以前の水準まで戻したい。テーマは『再

生』です。」

・・・今のあなたにも、それなりに胸を張って良い部分があるのでは？

「今の自分はダメダメです。でも、ただ単にダメと言うのではなく、様々な要素に分けて、それぞれの要素がどのくらいダメが評価することから始めてみます。どの要素も、0か100かかと割り切れるようなものではありませんから。」

・・・2回目のユニバーとあって、心中期するものはある？

「前は自分の納得行く走りがか全く出来ませんでした。その情けない気持ちは帰国後の動機付けにはなりましたが・・・。今回は納得行く感触を満喫して帰国したいです。」

伊藤恭子

1996年筑波大学入学 愛知県出身 OLCルーパー

最後のインカレ個人レースでのペナルティも、乗り越えられる選手だからこそ与えられた試練と言えよう。選考会は賞禄のトップ通過。代表に決定後ますます貪欲に研鑽を進めており、社会人1年目のこの年に競技者生活の土台固めを行なう様子を見せている。



深沢博子

1996年東京農工大学入学 東京都出身 Team 白樺



走行距離は少ないが、水泳で鍛えた身体のバランスにより、ソフトなタッチで森の中を駆け抜ける。新社会人。「上司を絶対説得する」という言葉に、意志の強さを窺わせる。トレーニングの、というより競技について考える時間の量と質の確保が今後の焦点。

(代表合宿では、コーチ陣から「深沢は走行距離が少ない割に・・・」と、よくからかわれている。)・・・周りの言い方は大げさですよ？

「でも、実際今までしてきたことはそんなものです。従来の自分の枠組みを越えていく必要を感じています」・・・最近、駅伝大会に出たりしているようで。「ロードレースは初めてでしたが、気持ち良く走れました。これから色々な機会にトライしていきたいです。」

小林啓恵

1997年東北大学入学 宮城県出身



外見からは円い雰囲気さを漂わせる、学生女子随一のサムコンパスの使い手。インカレクラシック制覇、ワールドカップ選考会1位と、「女王道」を歩み始めたかに見える。長期的展望から「今年中にもうちょっと向上する」と言い切るあたりも、何とも頼もしい。

塩田美佐

1997年筑波大学入学 栃木県出身



同門同期の上松と共に学生の枠を超えた活躍を見る。不器用ながら正攻法のオリエンテーリングに、持ち前の真摯さがよく表れている。走力は一級品。ナビゲーションの確実性を増し、ユニバーに向け、インカレに向け更なる飛躍を見せてもらいたい。

(道で、彼女に背後から迫られた選手は、男子エリートが来ているものと錯覚するとさえ言われる。)・・・スピードがある、という評判だけど？

「線を辿ると分かり切った部分は、他の選手と比較した場合速いかもしれませんが、自分ではそれほど速い動きをしているつもりはありません。ただ、登りの多いコースで優位であることは感じています。」

・・・それでは、つくばROC大会(註：ひたちなか国営公園にて開催)などはさほど得意なコースではなかった。

「うーん。そうですね。もっと、どこでも速く走れるようなものを身に付けたいです。」

柿並義宏

(1992年東北大学 山口県出身 Team 白樺)



技術論を好み、選手として、またコーチとして強豪東北大の礎を築いた。短めのコースを走る際に見せる切れ味には定評があるが、エリートクラスでの実績は乏しい。2回連続代表となるフランス大会には、以後の競技生活の方向性を問う決意で臨んでいる。

(ここ数年間、レース後結果に失望して「もういいです」と言っている姿が良く見かけられた。)・・・後ろ向きな発言が多いのでは？

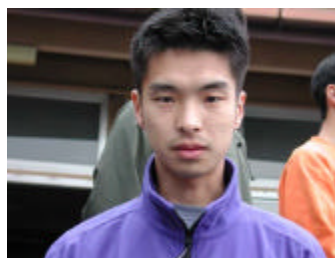
「自分に厳しい評価をして再出発を期しているわけで、後ろ向きだとは思っていません。本当にダメだと思ったら何も言わなくなるでしょう。」

・・・前はモチベーションを高めきれないまま本大会を迎えたそうだが？

「現在は、すっかりオリエンテーリングモードです。東大大会は不本意ながらAクラス(註：千葉県の日全日本リレー代表選考指定クラスであったため)への出走でしたが、得るものが多く、課題も見つけられました。主に、方向への意識と、ルートプランのスタイルの改善を図っていきます」

山口大助

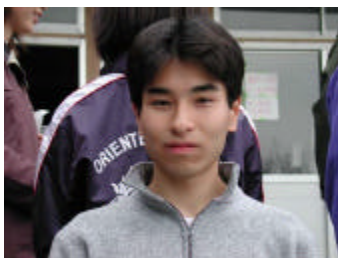
(1994年千葉大学 新潟県出身 ES関東C)



千葉大学の至宝も社会人生活に入った。トレーニング不足の状態を迎えた選考会では抑えめの走りを強いられながらもトップ通過、芸域の広さを見せつけた。本大会までに体調を充実させ、一段高いスピードの中で全体のバランスを整えられるかが注目される。

鈴木慎一郎

1995年慶應義塾大学入学 神奈川県出身 丘の上



インカレ個人戦の実績はショートの9位が最高ながら、着実に実力を高め、代表の座を手にした。オリエンテーリングをしない休日には山に登る。競技中、特に登坂区間で覗かせる、普段の愛嬌ある表情とは裏腹なタフさに磨きをかけて、初めての「世界」に挑む。

（選考会前夜に眠れなくなることを警戒し、金曜晩に睡眠時間を抑えて土曜日は朝からマラニックをしたそうである。狙い通り選考会は上位通過となったが・・・。）・・・通過後1ヶ月は少々気を抜いていなかった？

「ばれましたか。確かにトレーニングをなまけていました。合宿でメニューをこなし切れず、これではいけないと思い知らされました。」

・・・初めての国際舞台でもあり、代表決定後の新たな目標設定が難しかったのでは？

「その通りでした。でも、今は代表に決まった直後に高橋から言われた『Aファイナルを走りましょう』という言葉思い出して気持ちを奮い立たせています。」

・・・インカレの実績はチームの中で一番乏しい鈴木が、どのくらいやれるか、注目されていると思うけれども。

「インカレで振るわなかった分、悔しさをバネにやって来られました。その点で、インカレの結果も意義のあるものだったと言えます。Aファイナルという目標は遠いものかもしれませんが、やるだけのことをやります。」

・・・ところで、あのメンバーで、上位4人に入るというのも難しくてやりがいのある目標のように見えるけど、リレーに対する意気込みなどは？

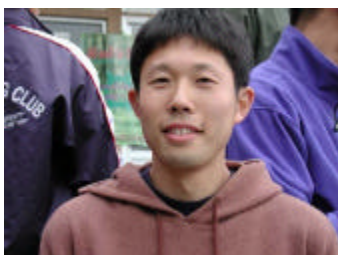
「自分はリレー向きの選手だと思っています。」

・・・ということは、当然走るつもりでいると。

「はい。皆さんにもそういう見方をしたいと思えます。」

高橋善徳

（1996年筑波大学入学 福島県出身）



3月のインカレクラシック優勝、4月のワールドカップ日本シリーズ出走により、すっかり有望若手との評価を定着させた。毎朝、新聞配達をするなど生活も規則正しく、オリエンテーリングも安定感ある正統派。チーム内でも一つの軸となることが望まれる。

紺野俊介

（1997年早稲田大学入学 福島県出身）



入学前、半ば拉致気味に奈良インカレに連れて行かれた全早稲田関係者期待の選手。飄飄とした顔をしつつ、ショート・リレーとインカレ二冠を達成した。「潜在能力は実績より遥かに上」との評価の証明に向け、モチベーションを高められるかどうかが鍵となるう。

金澤拓哉

（1998年東北大学入学 福島県出身）



東北大学・花の主将。長い脚を活かし、日光インカレで活躍。選考会でも好走を見せ、6年ぶりの3年生代表となった。性格は素直。遠征を通じてチーム内外から多くのことを吸収し、日本オリエンテーリング界のトップレベルに駆け上がることが期待されている。

（チーム最長身の彼は、チーム最年少でもある）・・・

選考会にはそれなりに自信を持って臨んだそうだけど、いざチームに入って、周りを見渡してみてもどう感じる？

「圧倒されるようなことはありませんが、長く走ることに關しては、他の選手との差を感じています。体を作らなければ、と思います。技術的課題についても、合宿を通じて深く考える機会が得られています。」

・・・大学では主将という立場ですね。周囲の反応はどう？

「言えば、応えてくれる体制があり、バックアップしてもらっていると思います。でも、東大会新人クラスに1年生をエントリーさせられなかったなど、後手後手に回っている点もあり、反省しています。自身の競技ととも、クラブ運営も気を引き締めてやっていきます。」

【代表コーチとして：村越真】

「ユニバーのコーチは、94年、98年、今回と3回目です。98年は、身内の不幸でトレーニングキャンプ半ばにして帰ってこなければなりませんでした。自分も含めて、かなり気合の入った強化体制で臨んだので、結果を自分の目で見るができず残念でした。結果自体も残念だったようですが、それを直接自分で感じることができないという意味でも二重に残念だとも言えます。今回はその借りを返したい。

合宿ではよく一緒にランオブをしますが、今までにない基礎のしっかりした、安定して森を走れる選手たちばかりです。ですから、貪欲に一步も二歩も上を目指して行ってほしいと思います。重要なのは、通過できるという強い信念を持って準備し、またレースに臨むことです。そろそろショートではAファイナルを通過することができるはずです。」

オリエンテーリングワールドより

オリエンテーリングワールドは、国際オリエンテーリング連盟（IOF）の広報誌である。10年以上の歴史を持つこの冊子は、これまで年4回発行されてきたが、1年前に編集者が替わってからは年2回発行となった。そのためニュース性の高い記事よりも、むしろIOFの政策を反映したオピニオン誌の色彩が強くなっている。

今号（2000年1号）の特集は環境問題である。今やスポーツの世界でも環境問題は無視できない。1999年のIOCのリオデジャネイロ会議でも、「スポーツと持続可能な発展」のための21世紀の行動指針が採択された。この行動指針の目標は、社会経済的な条件を向上すること、持続可能な発展のための資源の保護と調整、そして関係する主要な集団の役割の強化である。たとえば、大きな国際大会においては、巨大な競技場施設や宿舍が建設される。こうした開発にあたって社会的なニーズと矛盾しないような建設を試みることで、開発の無駄をなくすことなどがその具体的な例である。健康の保持も、調和のある発展の一部と見なされているので、健康教育もまた社会経済的条件の向上の不可欠な部分である。主要な集団として、女性や若者の貢献も強調されている。

今回のIOFの方針は、こうしたスポーツ全体の環境への意識を受けたものである。オリエンテーリングは、これまで環境に優しいスポーツと考えられてきた。しかし、オリエンテーリング内部でも環境保護のためにできることは大きい。たとえば車の利用である。特に北欧では、ほとんどの参加者は車で会場に集まってくる。車の移動自体、大気汚染に直結しているし、牧草地に設定される駐車場もまた、環境ヘインパクトを与えている。また会場で発生するゴミの問題もある。

同誌では、スイスのエリートであるブリギッタ・ウルフの取り組みが紹介されている。彼女は、トレーニングや大会でも極力車を使わず、公共交通を利用しているそうだし、空路での遠征も極力控えているというのだ。実際彼女は昨年の中国でのパークワールドツアーには、その理由から参加していない。もっとも今回の日本でのワールドカップには「非常に重要だから」という理由で参加している。彼女は空路を使う場合には自分自身へのペナルティーとしてWWF（国際自然保護基金）へ募金をする。その総額は600ドルになる。

また、2000年のオーリンゲンでのリサイクル活動が報告されている。前年のオーリンゲンでは利用された安全ピンを回収・リサイクルしたことや、シャワー・水場を設置するための鉄パイプも不用品を利用するなど、いくつかのリサイクル活動が行われている。ささやかな活動かもしれないが、このような活動によって、確実に地球の貴重な資源の浪費が抑えられるのだ。

個人的には、安全ピンのリサイクルは、もっと個人ベースにゆだねてもいいように思う。たとえば、安全ピンは配布しない。個人でもってくることにする。ただし会場でも50円で一組購入できる、とすれば皆前回の安全ピンを外して保管し、もってくるだろう。個人の責任を合致させることが、有効な環境対策の手段になるだろう。

環境への取り組みは、内発的というよりは多分に政治的な配慮に端を発するものである。それも、これからのオリエンテーリングにおいては、避けて通れないことである。本号で、紺野氏も指摘しているように、オリエンテーリングは閉じられた空間で活動している訳ではない。地主やハンター、自然保護から目の敵にされたら、公園以外でのオリエンテーリングは不可能になるだろう。そうならないためにも、オリエンテーリング界と一人一人のオリエンティアが環境への意識をもつ必要があるのだ。